

## [017] 総合文化学論輯表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6779637>

---

出版情報：総合文化学論輯. 17, 2022-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies  
バージョン：  
権利関係：



① 『総合文化学論輯』(ISSN 2189-0986)第 16 号刊行 2022.5.1

② 第 23 回総合文化学会（リモート）記録 2022.10.9→

第 23 回総合文化学会（リモート） シンポジウム

提題者： 荒木正見

第 23 回総合文化学会もリモートで行うべく準備していましたが、口頭発表の意思表示をされておられた方々が、論輯第 17 号(2022.11.1)に活動記録として掲載するには、いずれも準備が間に合いそうにないとのことで、急遽かねてより皆様のお知恵をお借りしたく思っておりましたテーマでシンポジウムを行うことにいたしました。

提題テーマは「オンライン授業の可能性」です。

提題者（荒木正見）も、諸事情からオンライン講義を行っていますが、新しい教育アイテムとあって、実践している東西各校の諸先生方にご意見を求めたり、内外の文献を参照したりして悪戦苦闘の連続です。ところが、このような情報交換の過程で提題者のささやかな試みに興味を持たれた方々から、提題者なりに行った内容をまとめて骨組みだけでも公表し、資料として示してくれないかというご依頼を受けるまでに至りました。そこでとりあえず『総合文化学論輯第 16 号(2022.5.1)』に研究ノートとして簡潔な記録を掲載させて頂きました。

しかし、提題者が行った試みはほんのひとりの試行でしかなく、本来オンライン授業というものは各教育内容に応じて多岐に亙り、多くの知恵を重ねていかねばならないものです。

そこで当シンポジウムでは、叩き台として、先の研究ノートをさらに簡潔にして提出してそれを契機として皆様のご経験や工夫などをご教示願いたく存じます。

提題は、広範な授業のほんの一端として提題者が関わっている大学や専門学校の一般的

な「講義形式」の授業に限定して、オンライン方式を導入して行なった教育成果を追求する試みを簡潔にご報告するだけですが、それに加えて皆様のオンライン授業の工夫や現状など自由にご報告頂くことでオンライン授業を考えることになれば幸甚に存じます。

以下、当シンポジウムの段取りです。

開催日は下記②の日にちになります。

発表と質疑応答の流れは以下の通りです。

- ① 提題者は発表原稿をこの学会事務局のアドレスに添付送信する。
- ② この学会事務局アドレスをキーステーションとして、全会員に発表原稿を送信する。（今回は **2022年10月9日(日)**）
- ③ 会員の有志は原稿に関する情報や意見、感想、質問などをこの学会アドレス宛、時期を決めて返信する（概ね400字以内ですが自由にお考え下さい。）。  
（今回は **2022年10月16日(日)**）
- ④ 学会事務局でそれを取りまとめ、発表者と会員に返信する。
- ⑤ 発表者はその返信の全体に対しての返事や意見、質問などをまとめ、時期を決めて事務局宛返信する。
- ⑥ 事務局は発表者の返信を会員宛送信する。
- ⑦ 会員でさらに情報や意見、感想、質問などがあれば時期を決めて事務局宛返信する。
- ⑧ 事務局はそれら意見や感想、質問などを発表者と会員に送信し、発表者はその返事を、時期を決めて返信し、事務局はそれを全員に送信する。
- ⑨ 必要に応じて⑦⑧を繰り返す。

提題：

## オンライン授業の可能性について

荒木 正見

はじめに

新型コロナ禍という歴史的な事件において社会全体が、感染を食い止め、生存を目指して、様々な試みを行っている。教育現場においても試行錯誤が繰り返されているが、なかでもオンライン方式は新しい教育方法として目覚ましい普及を遂げている。その長所に気づいた教育機関によっては、もはや感染症の終息以降においても教育現場での利用を考え、オンラインブースの設置など高額な設備投資も始まっている。このような動きに対して、2022年3月22日の文部科学省事務連絡（周知）では、新学期を迎えるに当たって、「豊かな人間性を涵養し、人格の完成を目指す上では、直接の対面による学生同士や学生と教職員の間的人的交流も重要な要素」とし、非常時の特例として認められるオンライン授業に関しては「今後も、感染症や災害の発生等の非常時において、本来の授業計画において面接授業の実施を予定していた授業科目に係る授業を予定通り実施することが困難な場合」とし、「当該遠隔授業等は、いわゆる同時性又は即応性を持つ双方向性（対話性）を有し、面接授業に相当する教育効果を有すると認められるものである必要がある」とそれまでのコロナ禍を睨んでの遠隔授業を前提としつつ、対面授業を推奨している。しかし、その表現からも文科省の苦勞が推測できるように、コロナ禍も今後も with コロナと言われるように完全な終息の見通しも立たないし、各大学がオンライン授業を柱に様々な工夫してきたことも大学の自主性を配慮してその表現も感染症対策に限定するものではなく一般的な非常時も含む可能性を開いている。

また一般に、新しいシステムにつきもののアレルギー反応に始まり、過剰な期待ゆえの失望など、ネガティブな反応も耳にするが、それゆえにこそ、この方法の長所短所を理解し、有効な利用方法を考えなければならない。

### 1. オンライン方式の講義

教育現場において多く用いられているシステムは Teams や Zoom が挙げられる。各校をキー局として教員・学生などの手元のパソコンと繋ぎ、相互交流を行うことができる。

各校のオンライン利用についての現状を調査するとさまざまな理由において導入されていることが理解される。

その第一には、時間的経済的理由である。運営費に苦勞している各校にとって学生に対する教育の機会均等を考慮すればオンライン方式は合理的な方法である。非常勤講師の通勤費用や通勤時間、学生の通学費や通勤時間を節約することができる。非常勤講師を得に

くい地方大学や通学距離の長い首都圏の大学は重宝しているし、海外の講師を雇用することも可能である。企業が次々にこのような合理性を求めてテレワークを導入していることと並行して各校も教育効果を検討しつつこのような合理性を追求する時代に入ったと言える。

第二には、当然ながら感染症の予防である。先の事務連絡ののちに新型コロナは第7波としてわが国に蔓延した。三密を避けるという基本的な予防法も教室という環境では満足な予防は行い難い。感染者の発生に伴って教員、学生のすべてが自室の手元パソコンで授業できるという環境はその点確かに気分的には安堵できた。また特にこの方法はPCR検査が陽性になって自宅待機を余儀なくされた学生も欠席しないで済む。このように、感染症に限らず何らかの事情で教室に行くことができない教員、学生においても同様に合理的な方法だと言える。

以上のような事情で、各校はその都度の事情に応じて対面授業とオンライン授業を使い分けながら授業を遂行している。当初は感染症対策として止む無く導入したオンライン方式は、教育アイテムとして認識し直され、各校はコロナ終息後も利用できるべくは利用しようという方針で、設備投資をして学生ホールにオンラインブースを設置するなど、新しい教育アイテムとして定着しつつある。

では、オンライン授業の適不適はどのように考えればよいだろうか。

文科省事務連絡からも伺い知ることが出来るように、対面授業にはそれなりのメリットがある。登校することで得られる教師・友人などとの総合的な人間的関りはその典型である。

授業に関して言えば、一般的な対面授業は、特に、小中高等学校のような管理的要因の強い教育現場や、学習のモチベーションが低い学生生徒を対象とする場合には有効で、それらの場面では対面でしっかり管理しなければならない。対面授業に固執する指導者は学生の自主的な集中力の育成よりも、いわば上からの拘束によって学生諸君を整然とした受講態度へと導こうとしているともいえるし、その現場の学生諸君はその程度のモチベーションであるともいえる。

さらに、通常の対面方式の授業では同じ空間における肌のふれあいが特徴として挙げられる。この肌のふれあいは、それなりにメリットデメリットがあるが、ゼミや実習のように指導者が学生に対して密接に関わらなければならない形態の授業はやはり対面方式がふさわしいであろう。

これらに対してほとんど一方的に語る「講義形式」の大学等の授業はオンラインの可能性を開くと言える。しかし、オンラインならではの教育効果を上げるためには、状況に応じたさまざまな工夫が求められる。以下、提題者なりに試みてきたその工夫の一端を述べる。

## 2. オンライン講義の工夫

オンライン授業といっても、録画した授業時間分のデータを流し各自自己都合で早送りなどしながら視聴するというものさえあるが、今回は素朴に、講師は別室でパソコンに向かって講義し、学生のほとんどは教室においてモニターで受講するか、感染症の陽性反応が出たり、その他健康面に問題を抱えたりなど事情がある学生は自宅等別室でパソコン受講するという形式で行った。いわば最も基本的な形式であると言える。

一方的に喋る講義の場合、対面式の授業の長所としては、先述のように学生に対する管理要因が挙げられる。ADHD 気味の落ち着きのない学生を注意したり、50分～60分が集中力の限度と言われるように、居眠りやよそ見、スマホなどの学生の疲れ現象を見計らって、緩い話を交えて時間を稼いだりなど、講師にも管理的な態度が要求される。かく生理的要因もあるので、講師がモニター越しに教室なり自宅なりの学生に、単に対面と同じく講義したのでは、学生は更にルーズに振る舞ってしまう。授業効果を上げるためには工夫が求められる。

そこでこのたび利用したもののひとつがリトリバル学習法である。オンライン授業は、講師の身の回りの情報が少ない分、集中しやすいし集中力の訓練になるということは学生の授業後の感想にも記されていた。

そしてこのたび、オンライン授業を行うにあたって、あれこれ調べて有効な方法を実践してみた。なかでもリトリバル学習法をアレンジした授業方法は成果を上げることができた。一般的に、「retrieval」は、取り戻す、名誉回復、損害補填などの意味があるが、学習法としては「思い出し学習」と呼ばれるもので、周知のように、何事につけても「思い出す」という脳の作業をすることが記憶力を高めると理解されてきた。

このような学習法についての研究で定評があるのがスタンフォード大学である。同校はオンライン教育をも意識しつつ脳科学の立場からのさまざまな学習法を提起してきた。スタンフォード大学オンラインハイスクール校長・星友啓氏は主に中高生向けの学習法としてその一端を平易に各所で公開しているが、筆者はそれらを参考にしつつ、大学や専門学校での当該学生を考慮しつつアレンジして教育現場で生かしている。(参考文献の一例：星友啓『結果が出る最強の勉強法』光文社・2021)

このたび行ったのはテキストもしくは詳細な配布資料に対して、授業中に補ったことをメモして、後でそれを利用して思い出しつつ講師が口頭で補った内容を、キーワードごとに文書にまとめるという技法である。この方式は新型コロナ対策の一端としてすでに対面授業で、授業を60分程度で切り上げ、あとは学内に分散してレポートを仕上げるという形で、実践してきたが、特にオンライン講義で効果があることを実感した。この技法は、提題者が教える学生のほとんどが医療職を目指すものなので、電子カルテ時代になってカル

テ記録技術に生かせる訓練にもなれば、という思いもあったし、学生諸君の授業後の感想にもそのスキルが身についたと述べられていた。

なお、前掲書では、「リトリバル」を、「ノートや教科書を見直して答えを探すのではなくて、自分の頭だけを使って関連した記憶を取り出す。」(『結果が出る最強の勉強法』126 頁)、と述べられているが、同時に「記憶の定着だけでなく、学んだことを整理する「まとめる力」や他の問題に当てはめて考える「応用力」にも非常に優れた方法」(『結果が出る最強の勉強法』129 頁)とも述べられている。一般的にも高齢者施設などでお互いに昔話を発表し合うなどといった応用例も耳にするが「思い出す」という脳の働きは今後も様々な可能性を探るべきであろう。

このようなことを前提にして行ったのが先に述べた方法であるが、大学レベルの講義の場合は情報量が多く、全く手掛かりもなく手ぶらでただ聞いたことを後でレポート化するというのは無理なので、いつでも立ち還ることが出来る最も基本的な情報としてテキストや資料を用い、それにさらに口頭で付加する情報についてはメモをとり、思い出しについてはそのメモの内容を基にして、付加した情報を、関連するキーワードごとに整理してレポート化するという方法をとった。

一方、集中しやすいだけに、疲労も強い。心理学的にも人間の集中力は 50 分～60 分が限度だと言われる。オンラインといっても、多くの場合は講師と感染症陽性者、濃厚接触者は自宅等別室で参加するが、多くの学生は教室のモニターを見るという形式なので、密を避けるというコロナ対策も考えて、授業時間の拘束は早めに切り上げて、のちに各自自由に分散してレポートをまとめるという形式をとったのは、一方で特に集中して疲れるからという理由もある。

それにしてもその間中、集中してメモを取るわけで、特にまじめになんでもメモしなければと頑張る方は、学生の感想にもあったように疲れるものである。リトリバル学習は要点を聞き分けて的確にメモし、後で思い出しながら正確に文章化するようにできればよいのだが、これも訓練が要る。先に述べたように、授業ではその訓練をしていざれカルテ記録において生かせるように意図した。

このように毎回レポートを提出し、それを毎回評価するというのは講師にとって負担であるが、学生の習熟度が確実に分かり、学生からの感想・質問等も相互交流できることは対面学習以上に情報交換が可能になり、効果的であったし、学生の習熟度は学生自身の感想にもあったようにぐんぐん増していった。講師としても資料を充実したり、毎回のレポートから理解度を測ったり、節約できる通勤時間以上の努力が求められたが、多くの学生はそれに応えて努力し、レポートの最後に任意で書いていただいた感想の多くは充実した時間を送ることができたと言われていた。

また、リトリバル学習の思い出し成果を測る手法としてはほかにテストを行うという方法もあり、実践してみたが、レポート化に比べて授業中の集中力が維持しにくいようで、

いわば油断してしまって 8 分の 1 程度の学生は成果が認められなかった。やはり、レポート方式の方が効果的なようである。

このように形式的な工夫はほぼ成果を上げたと言えるが、対面授業の長所を意識して内容においても工夫した。対面授業の長所の第一は先にも述べたように管理的側面であるが、これについてはこれまで述べてきた方法で乗り越えることができたと言える。むしろ対面授業以上に緊張を維持し集中力を高めないとメモはとれないしレポートも書けない。

次に、対面授業の第二の長所は人間的な肌の触れ合いが挙げられるが、これをオンライン授業で得るとなると授業内容で工夫しなければならない。

このたび工夫したのは、学生の多くが医療職をめざすことを考え、提題者が医療系の幾つかの大学で特に管理職として経験したことで授業内容の例にふさわしいものを取り上げて挿入した。対面授業では講師自身の経験を語るのはリアルすぎて時には嫌味になりかねないが、その点オンラインでは適度な距離があり、講師に親近感を持ってくれたという感想も頂いた。

### 3. 今後の課題

このようにオンライン講義という最も基本的な場面で行った工夫について述べたが、当然ながら授業というものは多種多様でその都度効果的な方法を模索しなければならない。

その場合、授業の目的に沿った方法を考えるとともに、学生の状況を的確に捉えて対応することを忘れてはならない。上記のように提題者は提題者なりにリトリーバル学習をアレンジして対応したが、自分の教育すべき内容や教育方法を前提としつつ、学生の志向性や能力などを検討し、具体的な方法を編み出していかなければならない。そのためには、オンラインという新しいアイテムが社会全体に普及し始めたばかりという現在、教育のそれぞれの領域において、自ら経験したことを公表しあって研究を深める必要がある。会員の皆様のご自分の工夫や現状をぜひともお知らせ願いたい。

[On Possibility of the Online Lesson]

[ARAKI, Masami・総合文化学会・哲学、倫理学、比較思想]

## 提題者によるまとめ

2022.10.20

皆様の熱いコメントを有難うございました。

取り急ぎ、個々のコメントに対するお答えをまとめました。

個々のコメントは原文のままに掲載し、その後にお答えを記しています。

お読みになられてさらにコメントがおありの会員は、10月30日までに学会事務局まで、  
(当アドレス宛) ご送信ください。

---

## 河村しのぶ先生

総合文化学会会員の皆様、

ご提題者 荒木正見先生

河村しのぶ

この度は、「オンライン授業の可能性について」という提題の元、このようなシンポジウムを開催していただきましたことに、御礼申し上げます。また、提題者の荒木先生におかれましては、ご体調不良の中、開催にあたる事務諸手続きもさることながら、大変興味深い議論をご提示いただきまして、心より感謝申し上げます。

わたくしは、現在、教鞭をとっておりませんので、いささか門外漢ではございますが、リモート授業、Distance-Learning の利用者の立場から、わたくしなりの意見を述べさせていただきます。

わたくしは、コロナという感染症が出現する前から FUTURE LEARN というオンライン上の教育機関で、自分の学びたい外国語と英語教授法を 40 コースほど修了いたしました。

FUTURE LEARN は、主にブリティッシュ・コモンウェルスの各大学とイギリスの企業が提携しており、受講者は、オンラインでの授業を受講し課題を提出して、合格すると、各大学の名前のもとに公式のサティフィケートが授与されるシステムになっております。

FUTURE LERAN が、具体的な狭い範囲の問題に対処する性質における能力を、その修了を持って担保する一方で、わたくしが知っている限りにおきましては、学位を授与するようなケースの場合、2021 年ごろから、オンライン授業は急速に減少しています。興味があつて時々見ていた、ロンドン大学 (London School of Economics and Political Science) やわたくしの母校ウェールズ大学 (現: Aberystwyth University) では、Distance-Learning による BA、Masters、特に PhD. の取得コースは減少しております (2022 年 8 月 10 日確認) (注: 国際政治学の分野に限ります。同じ大学であっても、他の分野では、Distance-Learning を開講しているものもあります)。コロナの影響により、その前年にはあったことを確認しております (2020 年 5 月ごろ確認)。

このことから導き出されることの一つには、具体的に数値化できるような評価をすることができる科目については（英語教授法や、韓国語、中国語、ドイツ語、スペイン語など）これからもオンライン授業はさらに改良されて主流になっていくことさえあり得るかもしれません。

その一方で、討議が必要である科目（個人的な例では、国際政治学などという社会科学、文学の解釈など）においては、オンライン授業では限界があるのかもしれない。なぜならそのような科目における討議は、共有された空気間のなかでこそ、言語化された言葉の共有がたやすいからです。

以上のように、わたくしは、オンライン授業の必要性はこれからもあると考えますし、それによって得られる教育の機会の可能性の拡大を支持します。一方で、科目や討議の内容によっては対面授業でないと、深みがでないことも、また事実であるのではないかと考えます。

第一回目は、以上の二点を提起させていただきたいと思います。これから、他の会員の先生方のご意見を拝読するのを楽しみにしております。ありがとうございました。

令和4年10月10日

元九州大学法学府博士後期課程

：日本翻訳連盟認定翻訳士・産業翻訳事務所代

表

河村 しのぶ

※河村しのぶ先生へのお答え

荒木正見

豊富なご経験に基づいた海外の情報と提題者の健康面に対するご厚情を有難うございました。それにしても各国も新型コロナとのかかわり方を睨みつつ、オンライン教育と対面教育との双方を状況に応じて使い分けようとしているようですね。まだまだ不安定かもしれませんが、各国でこのシンポジウムのような話し合いを行いつつ良い方法を模索していくようです。そして、ただ一つ言えることはオンライン出現以前の全面対面方式には戻らないだろうということです。過去には郵便を利用した通信教育がありましたが、何割かは対面でのスクーリングが必修でした。現在では100パーセントのオンライン授業で卒業できるコースもあります。他方で、博士課程の授業を経て博士学位を取得するとなると、指導教員の手厚い指導も必要になるでしょうし、研究者としての一般的な心得や姿勢などの

教育も求められるでしょうから、やはりオンラインだけというのは、個人的に不安な気がします。状況に応じて形態を模索しつつ進んでいくのでしょうか。

.....

壬生正博先生

荒木正見 先生

壬生正博

「オンライン授業の可能性」のご論考をたいへん興味深く拝読させていただきました。2020年の新型コロナの大流行により日本社会全体が麻痺し、教育現場でもオンライン授業の実施を余儀なくされ、試行錯誤の時期だったと思います。当時は、多くの学会においても学会開催の中止やプログラムの一部変更なども目立っていたように思います。

私が勤務している福岡歯科大学では、このような状況下で Zoom や Moodle を通じてオンライン授業が行われました。勤務校の特質上、実習が多い環境ですので、実習担当の先生方はたいへん苦勞していたようです。事前に Zoom である程度説明しておいて、キャンパス内でのコロナ感染に十分配慮しつつ、少人数制で実習を実施していた教科もあったようです。私の場合は、語学（英語）を主に担当しておりますので、学校側が指定した Moodle を使って、授業資料や動画を一定期間アップし、それを学生が自宅等からその指定期間内に取り組むというオーソドックスな方法を取りました。動画作成については、教科書の英文を PowerPoint に入れて、一文ずつ解説した音声を録音していきました。たいへんな時間と労力を強いられましたが、一度作成すれば、次回の授業でもブラッシュアップしながらも使える利点があると思います。今でも使っています。

今年度に入ってから基本的に対面授業を行っております。Zoom は、学生面談等にも活用されています。Moodle に授業後の資料を載せたり、レポート課題を出したり、その他、いろいろな活用もされています。

以下は、荒木先生へのご質問等です。

○医療系の学生に対するリトリーバル学習法についてたいへん興味を持ちました。できれば、先生が実践された学生の学年、講義名、人数などの他、授業で配布なさった資料や学生が作成した文書など（その一部）をご提示していただければ、先生の取り組みがより体感できるだろうと思いました。

○5頁18行目あたりの「いつでも立ち還ることが出来る最も基本的な情報としてテキスト

トや資料を用い、それにさらに口頭で付加する情報についてはメモをとり、思い出しについてはそのメモの内容を基にして、付加した情報を、関連するキーワードごとに整理してレポート化するという方法」ということについて、学生はレポート化の作業中に、どの程度、資料やメモを見ても（振り返っても）いいのでしょうか。また、「キーワード」については先生が提示するのですか、それとも学生が各自でキーワードをピックアップして整理するという流れになるのでしょうか。

ご教示いただけますと幸いです。

よろしく願い申し上げます。

### ※壬生正博先生へのお答え

荒木正見

ご丁寧なコメントを有難うございました。ご勤務先での状況はよく分かります。このような情報の蓄積が必要ですね。

ご質問ですが、非常勤講師として対応しているのは大学・専門学校など数校で看護師・放射線技師・検査技師・医療工学等のコメディカル関係の養成が主な対象です。人数は主に1クラス30名から150名とばらつきがあります。授業科目は、哲学、哲学史、倫理学、医療倫理学、人間関係論などですが、いずれも単純な講義形式の授業で、国家試験対策として原則必修か選択必修です。学年は全学年にわたります。倫理学や医療倫理学で最初に配る資料を一例として以下に掲げさせていただきます。荒木の資料は意外にも現役の看護師の方々からクラウド化してオープンにしてほしいというご依頼があるもので、いくつかは論輯に研究ノートとして掲載させて頂いております次第です。なお、この資料はほぼ60分を想定しています。資料は原則、教科書を執筆するくらいの質を意識しますが、なるべく分かりやすく表現するように心がけています。

提題に参照したリトリーバル学習は中学高校を対象としたもので、記憶すべき情報量が少ないため、授業中のメモは最小限にと述べられていますが、大学の講義では情報量が圧倒的に多くなりますので、テキストがあればテキストと資料を交互に用いるような、いわば一見普通の授業を行います。その際、授業を行うものとしては、「キーワード→定義→事例→実践上の要点」の流れを頭にフォーマット化しておいて、資料もしくはテキストの中のキーワードから確認しつつ語っていきます。時間は60分をめどですが、正直いつもオーバーしてしまいます。学生はそれを自分なりにメモして、残った30分の間に情報交換したりなどして、1週間後の次回の授業に提出すべく内容を思い出してレポート化することになります。レポートでは資料・教科書に書いてあることは省いて講師が付加した内容をリトリーバル的に思い出してA4用紙1枚プラス $\alpha$ くらいで書いて頂きます。もちろん資料・テキストは自由に参照して頂きます。オンライン方式で弱い双方向交流はこのレポ

ートを通じて行いますので、質問等も書いていただきます。当然学生の理解度も測れますし、毎回10点満点で採点して、期末成績に反映するようにしています。この点は以前の一般的な対面授業以上に密接に行われているような気がします。ただ、お分かりのように講師側の負担は90分喋ればそれで終わりというわけにはいきませんから。結構大変です。

なお、ご質問にありました学生のレポートは個人情報として学生自身にさえ返却せずシュレッダー処分するようにと指示される大学もあるくらいですので恐縮ですが引用することはできません。

以上、ご質問に対するお答えは以上ですが、授業の内容や形式によって様々だと存じます。提題者の授業形態はその点最も単純なものだと思います。僅かでもご参考になれば幸いです。有難うございました。

資料の例：

## 多様性の価値資料      荒木 正見

### 1. 倫理学の主要なテーマは「人類の生存」である。

諸学の根底である哲学の主なテーマは存在と認識にある。それに対して、哲学から派生してきた倫理学は価値をそのテーマとする。ソクラテスの「無知の知」、即ち、我々が知っていると思っていることには限界があるという知こそが哲学の嚆矢であるとされるように、我々の認識を超えた唯一・絶対・無限な存在こそが存在そのものである。従って、唯一・絶対・無限な存在にこそ価値の根本があることになるが、ここで生じてくるのがそれを認識している我々の存在である。我々は他のすべての存在（事柄ともいふべき物質を超越したレベルでの）とともに唯一・絶対・無限な存在を構成している。特に我々人類はそのことを思考することによって唯一・絶対・無限な存在に関する知を深め、翻っては唯一・絶対・無限な存在を発展させることを特徴として持つ。我々自身が望むと望まざるとに関わらず、唯一・絶対・無限な存在はそれ自身の発展のために我々のそのような在り方を決定づけている。すなわち他のすべての存在と共に我々人類は唯一・絶対・無限な存在によって必要とされている。そのことは本能として無限な奥行きから生じてくる。その本能の最も根本的なものが「生存本能」である。倫理学の根本的なテーマである価値の根底には「生存」があるといわなければならない。

### 2. 人類は「危機管理」の重要な能力として「コミュニケーション」能力を持っている。

すなわち、危機が迫った時には知識を駆使して相互に知らせ合い危機を回避する。

人類を他のすべての存在者と比較してみると、最も優越的な特徴として緻密なコミュニケーション能力を持っているといえる。危機が迫れば人類はそれを相互に伝えあい、危機回避の方法を共有して危機を回避しようとする。人類の緻密なコミュニケーション能力はそのことを推進し、人類は様々な危機をかいくぐって来たともいえる。

3. その知識は一般的には多数派の知識で間に合っている。これは想定内の知識である。

その知識はいわば共通財産として人類の情報網に蓄積されてきた。倫理的法則や社会通念、そして、法といった形で人類の多くがそれを守れば人類の生存が保証されるといった形で定着してきた。それを守れば多くの人間は安定的に生きられるというものである。このような知識が特に役に立つのは多数派の人間であり、また、法則や決まりや生き方などは意識化され、みんなですべてを守ろうという性質を持つものなのでそれは想定内の知識であるといえる。

4. ところが想定外の危機が迫った時にはこの知識は役に立たない。究極的には、多数派の人たちが思ってもみなかった「少数派」や「少数派」を取り巻く知識が求められることになる。この知識は想定外の知識であるから普段の生活では役に立つかどうかかわからない性質を持つが、それゆえに価値あるものである。

少数派の知識や少数派に由来する知識が多数派に貢献している例は枚挙にいとまがない。想定内の知識で普段は間に合っているのではなかなか気づかないのだが、想定外の危機が迫った時には、少数派の知識や少数派に由来する知識が求められる。

5. 人類は究極の危機管理として、日ごろ役に立たないかもしれない知識を文化・研究・芸術・伝統などのような形で維持している。そこでは、少数派の人々によって多様な知識が追求され保存されている。人々がこのような多様なものを大切にするという本能こそが、最後の危機管理として多様性が必要なのだという理由に基づくものである。

このような、日常の役には立たないものにも人類は本能的に価値を感じている。それは、すぐには役に立たないかもしれないものを、文化・研究・芸術・伝統などという名の下で追及し多様に発展させ、保存させていることに現れている。それらに携わる人々は決して多くは無い。少数派ゆえに多数派からはなかなか理解もされにくい。共通の知識ではないが、それぞれが個性を持って多様に展開してきた。そのような多様性についてその価値についてよくは理解しないにもかかわらず人類はそれらを維持してきた。それは本能的に危機管理に必要なだと感じているからである。

6. 多様なものを大切にするという本能は、少数派に対するいじめや弾圧に対して不愉快に感じたり、絶滅危惧種に対して何とか生き延びてほしいと願ったり、ペットの殺処分に対して不全感を感じたりする感情や感覚になって現れる。これらは実は究極的には人類の生存に関わる問題だと直観しているのである。
7. また、古来すべての命を大切にと説いた理論はあるが、その逆はない。これも多様性の価値原理の重要性を意味している。(例：阿弥陀如来信仰)
8. その知識は多様であるがゆえに、殺人の方法といったような危険なものも含まれる。従って多様性の価値原理には、同時に、それを実行してよいのか実行すべきではないのか、といった「知恵」が付随する。
9. そして、現実的には時には多様性が維持されず、圧迫されることも生じる。それは、戦争のように主に経済的ゆとりがない場合である。企業であれ、社会であれ、ゆとりがない場面ではしばしば、合理的という名のもとで多様性が圧迫される。一時的には、それも必要ではあるが、上記の理由で、それは究極的には脆い性質を有するのである。

.....

荒木雪葉先生

第 23 回総合文化学会 シンポジウム  
提題者へのご質問

福岡大学教務部共通教育センター 外国語講師  
荒木 雪葉

1. 書類 3 ページ下から 4 行目あたりに触れられている、学生の「モチベーション」に関して

質問者の経験に基づく発言だが、2020年度、すなわち遠隔授業の試みが開始した1年目が終了した時点で、自らのモチベーションを保つのが課題だと考えるという学生の発言があった。

遠隔授業はモチベーションの維持という点で、学生の意識を高める効果もあったのではないかと思う。いかがだろうか。個人的な考えで構わないので、お聞かせ願いたい。

## 2. 講義以外の形式のオンライン授業の可能性について

4 ページ上から 5 行目に「ほとんど一方的に語る『講義形式』の大学等の授業はオンラインの可能性を開くと言える。」とある。

これに関して、2020年度、2021年度前半期は、ゼミや語学の授業でもオンラインでの授業を余儀なくされた。今後も同様の状況が発生しないとも限らない。講義形式以外の授業におけるオンライン授業の可能性について考えはあるか。

## 3. 「2. オンライン講義の工夫」に関して

オンライン授業について、リアルタイム双方向型オンライン講義を「基本的な形式」とされているが、大学によっては「オンデマンド型」など他の形式を実施している場合もある。学生たちの年代はインターネット上で動画を見て様々な学習をすることも日常的に行なわれているため、学生からすれば、リアルタイム型は必ずしも基本的な方法であるとは限らないと考えられるが、いかがだろうか。

## 4. オンライン授業全般に関して

なお、質問者の2020年度前期における語学授業でのオンライン授業の工夫は「令和2年度前期 中国語科目の遠隔授業に関して」として、福岡大学研究推進部『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』20巻2号（令和2年12月）にまとめた。現在、語学は対面授業に戻ったが、オンデマンド型でも学べるように資料の提供は続けており、小テストなどはMoodleシステムを用いて実施している。さらに現在担当している非常勤先では、留学中でも授業を受けたいという学生のために動画での授業資料の提供を行ない、他の対面授業を行なっている非常勤先でもレポートの受け渡しはMicrosoft Teamsを用いる予定である。

個人的には、学習の機会をさらに開いていくべき現代において、今後の日本や世界の授業のあり方については、完全対面に戻すのは望ましくないのではないかと考えている。今後どのような大学教育システムが求められるか、お考えのことがあればお聞かせ願いたい。また文科省がどのように考えているのか、ご存じであれば教えていただくと幸いです。

※荒木雪葉先生へのお答え

荒木正見

1. おっしゃる通り授業において学生のモチベーションを引き出すのは重要かつ大変なことだと思います。提題者の場合は対象学生のほぼ全員がコメディカルの国家試験を受けるものですから、それを意識した授業をすれば大体ついてきてくれます。毎回の授業では医療人としての心得には言及せざるを得ない科目ですし、自分がかつて医療系の大学やその関連病院で経験したことなどを交えればよく聞いてくれるようです。また、リトリバル学習を活かして授業においてテキストや資料以上に述べたことを1週間後にレポートとして提出するという課題を科すことで授業に集中せざるを得ない状況をも作りました。

ここまでは対面でも同じ事のようにですが、特にオンラインにおいては、画面上の講師自身の情報が少ない分、授業に集中するようで、上の条件とも相まって提題者の授業では対面よりも良いレポートが提出されました。

オンラインといっても、講師学生とも自宅等個別の環境の場合から、講師とコロナ陽性その他登校できない学生だけが個別の環境で後は教室で画面を見るという場合までありますが、どのような場合でもオンラインのほうが集中できた、集中しすぎて疲れたなどの感想をくれました。大人たちが、対面授業でしっかり管理的に集中させなければと思っ

ている以上に、若い学生諸君はオンラインという画面になじんでいるような印象です。

2. オンライン使用の情報を有難うございました。提題者は講義方式以外のオンライン授業を行っていないので軽々なことは言えませんが、語学塾や学習塾では1対1の環境を作るように個別のタブレットを媒介にして成果を上げているようです。企業が積極的に導入しているように、本来合理的なアイテムですから工夫次第では教育効果を上げ得ることは予測できます。今後工夫の情報を持ち寄りたいものです。

3. 提題レポートでもふれたように、文科省は一見対面授業を推進しているようには見えますが、「通達」ではなく「事務連絡（周知）」という緩い表現ですし、その内容においてもコロナに限らず状況における各校の独自性を認めています。若いころから何度も文科省の研修に派遣された折での印象からも我が国の文部行政は社会的状況に柔軟に対応し各校の自由な試みを認めようとする豊かな苦勞をしていると思われました。文科省が対面授業を推奨する主な理由は、部活などを含んだ、学生の総合的なキャンパス生活の保障にあるわけで、対面授業という授業形態に固執しているわけではないと思われます。授業は授業なりに対面の双方向性を維持しつつ、様々に必要な事態にはオンラインを利用して教育成果を上げるという複合的な方向性が今後とも追及されなければならないと思われます。そのことを読んで、すでにオンラインブースを新設している大学も現れているくらいです。また、社会全体のオンライン化が進行しつつ現在、教育においても学生がオンラインというものに慣れておくことも必要です。それにつけてもまだまだ始まったばかり、このような議論を進めていかねばなりませんね。

.....

## 岩武光宏先生

荒木正見先生の『オンライン授業の可能性についてリモート』について

拓殖大学の岩武光宏と申します。

荒木先生の提題につきまして、現下の高等教育における重要課題をご指摘されていることに、強く賛同いたします。さらに、先生がリトリバル学習法をアレンジした授業方法を開発・実践されていることに深甚なる敬意を表します。

さて、小職は学生支援対応および某短大（特別教養講座）での遠隔講義での経験より愚見を申し述べます。ご指摘のとおり未曾有のコロナ禍、アフターの「with コロナ」と数年間におよぶ教育環境の激変は、負の面のみならず多くの（授業改善という意味においても）創造的側面を発動させたと考えます。その効果のひとつは、そもそも大学での学習環境に適応が難しい学生に、積極参加の道を開いたことにあると思います。すなわち、学習機会の多様性を意味します。受講人数や講義形態によっても様々ですが、Zoomなどを駆使すれば、対面で引き出せなかった学生の意欲を刺激することも可能です。もうひとつは、オンライン授業を補完するための文通（メール等）を、文字による表現力向上の好機と捉えることにあると考えます。今後はオンラインと対面の重層的かつ多面的な授業形態を構築し継続させることで、より高い教育効果（学力向上、スキル習得、人格形成）が得られるものと考えます。

### ※岩武光宏先生へのお答え

### 荒木正見

学生支援対応と授業との双方の角度からの情報を有難うございました。企業が実践しておりますように通勤通学を合理的にするという物理的な面も痛感するところですが、一方でご指摘のような多様な学生に対する学習機会の可能性を引き出すという重要な教育効果こそが求められるところです。部活や飲み事で学生生活らしさを味わえる恵まれた学生ばかりではありません。これまでの授業や大学生活で得られなかった多様な大学生活や授業などによって大学全体がさらに豊かな場になるはず。大学という総合的な場にオンラインというアイテムをどのように組み込んでいくのか、それぞれの場面での工夫をみんなで探

求していきたいものです。

.....

**山口 誠先生**

2022.10.09 第 23 回総合文化学会リモート方式発表

- ・荒木先生のシンポジウム提題「オンライン授業の可能性について」への感想
- ・質問者：山口 誠（ヤマグチマコト・九州大学大学院人文科学府博士後期課程単位修得退学・哲学）

○ ご挨拶

この度、幸運にも、荒木先生のご提題論文を拝読する機会に与り大変勉強になった。先生には大変感謝申し上げます。下記、非常に些細なことではあるが、言わば露払い的な質問をさせていただいた。何かコメントをいただければありがたい。

○ 感想

本提題で主に扱われているリトリーバル学習法は、受講した授業内容を自分の頭だけを使って記憶を取り出すという、即ち「思い出す」という特徴を持ち、記憶の定着だけでなく、学んだことを整理する「纏める力」や他の問題に当て嵌めて考える「応用力」にも非常に優れた方法である。授業に際しては、テキストやメモを立ち返るべき資料として用い、それを基にして関連するキーワード毎に纏めてレポートとして提出してもらおうという方法をとるものであった。其処で、質問なのだが、授業が終了した後に行われるレポート提出は、例えば授業の翌日迄というように早めにさせた方がよいのか。それとも、次週の授業迄にというようにそれ程拘らなくてもよいのか。この質問は所謂「忘却曲線」という概念が念頭に置かれており、特に記憶の定着の為には早めの復習、即ち思い出しが有効だと思われるが、先生の授業ではその辺りの配慮はあったのか。

※山口誠先生へのお答え

荒木正見

リトリーバル学習についてのご質問を有難うございます。

実はコロナ禍が始まったころ、様々な感染防止策を取りながらの対面授業で次々に陽性者が出て、空間的な三密を避けることが出来ないのなら時間的に早く終わって解散させあとは自由に学内に散ってレポートを仕上げ提出して帰る、というリトリーバル方式を意

識した苦肉の策をとったのですが、100名も200名もの対面授業における学生の甘えというべきか、何時間待っても提出しないうえに提出したのも時間不足で低レベルという始末。それから、教員や感染者は自宅等別室で、多くの学生は広い教室の所々におかれたモニターを見ながらのオンライン授業に転じて行きました。物理的に当日のレポート回収はできないので非常勤講師としては必然的に翌週回収となったのですが、授業後の30分弱は、学内に散ってメモが取れなかった箇所を友人と補ったりして（これが短時間における思い出に当たります。）から帰宅後にまとめる方式に変えました。毎回のレポートを読み採点するのは大変な労働で、これなら対面授業のほうがずっと楽ですが、当然、レポートのレベルはぐっと上がり、質問感想等も書いてくれて、オンラインの弱点といわれる双方向性も、むしろ対面よりも密になったと、学生も書いてくれました。

もちろん、本来のリトリバルは思い出すことにあり、高齢者施設や幼児施設などで思い出を語らせるといったフリーハンドの方式が原点ですが、学校や塾ではそれでは成り立たないと必要最小限のメモや情報やテキストを手掛かりに思い出すという方式になっているようです。

大学や専門学校の授業内容はさらに情報量が多いので、本来のリトリバル方式よりはずっと手元の資料やメモが多くなりますが、60分程度集中してメモを元にして、講師が資料やテキスト以上に付加した内容を、キーワード毎にまとめるというのは、やはり思い出し学習のうちに入るのではないのでしょうか。

なお、提題者としては、自分の授業科目や医療系の国家試験を目指す学生という特質を考慮してこのような方法をとったわけで、リトリバルという要素を、状況に応じて使い分け、工夫することが必要だと思っています。

※以上です。皆様、有難うございました。

先にも書きましたように、更にコメント・ご感想などあれば、  
当アドレスまでご送信いただければ幸いです。

## シンポジウム再コメント・御礼・全体のまとめ

シンポジウムのコメントに対する提題者のご返事に対して頂いた再コメントなどに対するお返事と御礼、全体のまとめなどを述べてシンポジウムを閉じたいと思います。

2022.11.1 荒木正見

## 壬生正博先生

荒木正見 先生

この度は、ご丁寧なご回答を頂戴し誠に有り難うございました。

まずは、哲学、哲学史、倫理学、医療倫理学、人間関係論などの複数の科目において、毎週、多くの受講者のレポートに目を通して採点なさっている先生のご努力に心より敬意を表します。受講生にも先生の熱意が伝わっているものと拝察いたします。

授業の資料の具体例として「多様性の価値資料」もご提示いただき有り難うございました。資料を一読させていただき、先生のご講義の一部を体感することができました。医療の分野にも応用できそうな内容ですので、受講生が真剣に先生の授業と向かい合い、できるだけたくさんの情報をメモしている様子が目に浮かびます。

荒木先生が今回の提題でご紹介くださいましたレトリバル学習は、講義を聞き流すだけではなく、講義後に内容を思い出しながらレポートにまとめることで、授業の復習のみならず、長期的な記憶の定着にも大いに役に立つ学習方法だと思いました。

貴重な実践方法をご発表いただき有り難うございました。

壬生正博

## 河村しのぶ先生

総合文化学会の皆様

ご提題者 荒木正見先生

この度は、ご回答をありがとうございます。さらには、先生方のご意見やご質問と、荒木先生からのご回答を拝読し、オンライン授業の可能性について、熟考する機会をいただきましたことに、感謝申し上げます。また、このような興味深いシンポジウムに参加させていただくことを楽しみにしております。ありがとうございました。

河村 しのぶ

## 山口誠先生

### 第 23 回総合文化学会リモート方式発表

・質問者の感想文に関する荒木先生の応答へのお礼と、他会員によるコメントへの質問者  
なりの所見

・質問者：山口

○ 質問者の感想文に関する荒木先生の応答へのお礼

荒木先生におかれては、先の感想文での質問者の感想に対して貴重なご教示をいただき大変感謝している。質問内容は「授業が終了した後に行われるレポート提出は、例えば授業の翌日迄というように早めにさせた方がよいのか。それとも、次週の授業迄にというようにそれ程拘らなくてもよいのか」ということであったが、後者のように、それ程拘る必要はなく、次週の授業迄に提出させるようにしても学生の習熟という面で十分な効果があるということに理解した。質問者の見解だが、レポート提出を早めにさせなければならないか否かはさほど重要なことではないようにも感じた。以上の質問者の理解に関して、誤りがあったり不足しているところがあれば、お手数ながら何卒ご教示願いたい。

### 御礼とお返事と全体のまとめ

### 荒木正見

このたびは提題に対しましてみなさまの誠実なコメントを賜り有難うございました。

デジタル庁が大きな6つの柱のひとつにデジタル人材育成方針を打ち出し、社会に対して膨大な重点項目を提出しつつある今日、文科省も教育現場のデジタル化を考慮しつつ模索しています。デジタル庁が先頭に立って膨大な要望を提出しつつあることから分かるように、社会全体が急速にデジタル導入していきつつあります。学生に対する教育もその社会に対応できるようにしていかなければなりません。ご存じのように病院等の採用人事でも、オンラインをはじめとするデジタル能力、体験を評価条件に導入しつつあります。

他方、デジタル化の一目標がSDGsの遂行や学生・教員の多様な状況に対する教育の機会均等にあるように、それらを遂行するためにオンライン授業などの合理的な手段をも導入することも必要でしょうが、既成の授業をそのままオンラインで行えばよいというものではありません。授業内容や授業方法の中で、文科省が期待する学生生活の双方向性や総合性や教育の機会均等を発展させるためにはどうすればよいのか、それによってこれまで

の授業方法に勝る教育効果を得るためにはどうすればよいのか、そのようなことを今後とも考え工夫し続けなければならないと思います。上記、山口誠先生のご理解はその通りですが、レポート提出時期をどうするかは、学生の状況や授業の内容によってその都度工夫しなければならないと思われます。

このように、今回のシンポジウムは膨大な今後の課題に向けてのほんの契機でしかありません。提題の中でも述べましたように、会員の皆様方の今後の状況や工夫など情報共有して皆でより良い授業を行っていきたいと思います。折を見て皆様の情報をご報告賜れば幸いです。

皆様の、ますますのご健康とご発展をお祈り申し上げます。

荒木正見

③ 『総合文化学論輯』(ISSN 2189-0986)第 17 号刊行 2022.11.1